

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03416

研究課題名(和文) デジタル化時代における映像文化の日常の変容

研究課題名(英文) Transformation of Media-Imagery Culture in Digitalized Age

研究代表者

長谷 正人 (Hase, Masato)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：40208476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,500,000円

研究成果の概要(和文)：近年におけるデジタル・カメラやその周辺機器の出現は、人びとの間に、日常生活を自ら映像で記録し、保存し、インターネットを通して交換しあうといった、新しいメディア文化を生じさせている。本研究は、トム・ガニングによる最新の基礎的な映像理論の研究と社会学的な映像文化の実証的分析から、こうした映像文化と人間の関係の変化を捉えることを目的とした。そしてその関係の変化を捉えるために、人間がいかに関係を「見る」のかという従来の問題だけでなく、いかに関係を「撮る/撮られる」のかという新しい分析軸に加えた、重層的な視座からなる映像研究の可能性について考察した。

研究成果の概要(英文)：Recently, a new vernacular visual culture using digital cameras and peripheral devices has been invented. People now record and preserve their daily life with pictures by ourselves and exchange that data with each other using The internet. This study investigated the change in relations between people and their culture while considering the cutting-edge visual theory of Tom Gunning and analyzing the vernacular visual culture using empirical sociological methods. In order to understand these changes, we considered not only traditional visual theory in terms of how people saw visual images but also the possibility of new visual studies having multiple viewpoints which included how we "take pictures /have pictures taken of us."

研究分野：文化社会学

キーワード：映像文化 日常生活 トム・ガニング

1. 研究開始当初の背景

従来の映像研究は、メディアごとに制度化された映像文化を、それぞれの専門的研究者たちが個々に分析する形で展開されてきた。映画研究は、映画がいかにかに物語を表象する表現様式を生み出して人々に大きな影響を与えてきたかを記号論的・大衆文化論的に分析してきたし、写真研究は、写真家たちがいかにかに作家的表現を探求してきたかという美学的な分析や報道写真や広告写真の社会的影響をめぐるメディア論的な分析が行ってきたし、テレビ研究は、放送がいかにかに人びとの生活に影響(効果)を与えてきたかをマスコミュニケーション研究として行ってきた。

しかしこうした大衆文化論、芸術学(美学)、マスコミュニケーション研究などによる個々の映像メディアの研究は、様々な事実を明らかにしたとはいえ、人間の生活にとって「映像文化」とは何なのかという、より根本的な、人類史的なレベルの問題を取り逃がしてきたといえる。映像は、それ自体が19世紀にテクノロジーとして発明され、人間の社会生活の外部から到来して私たちの生活を劇的に変化させた。例えばヴァルター・ベンヤミンが「複製技術時代の芸術作品」において、写真や映画などの複製芸術が「人間の知覚のあり方」を変化させた(アウラの凋落)ことを問題にしたとき、彼は、映像テクノロジーによる私たちの生活の変化という人類史的問題を論じていたはずである。また同時代のテオドール・アドルノ、ジークフリート・クラカウアー、ペラ・バラージュらによる映像文化の研究も同様に大きな歴史的視点を持っていた。

一方、近年の映像文化はデジタル化によって大きく変容している。デジタルハンディカメラや携帯電話内蔵型カメラなどの社会的普及によって、私たちの日常生活の中にはこれまでとは異なった種類の映像が溢れかえるようになった。従来の映像文化論の視点では、こうした問題は、映像の痕跡性(ロラン・バルトが『明るい部屋』で言う「それは-かつて-あった」)の喪失として、あるいは人為的操作性の増大の問題として批判的に捉えるしかなかった。

しかしそのように、近代的美意識によって写真的アウラの凋落を批判するより以前に、まずはそのような技術的変容のなかで、いま人間が映像を扱うことを通していかなる文化を生み出しているかを正面から捉えることが現代の映像文化を捉える上で必要ではないだろうか。つまり、ベンヤミンの複製技術への問いが持っていたような人類史的な大きな視点が忘却されている現状を認識的に打破することが、私たちに求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、映像テクノロジーの出現が人間の社会生活をいかにかに文化的に変容させたかを多角的に明らかにすることである。

21世紀に入って、映像文化は、19世紀から20世紀のあり方からは大きく変化したという社会的事実がある。これを捉えるためにも、人類史的な視野を持ち、制度化された従来の研究を覆し、映像文化を捉え直すことを目指す必要がある。

従来の映像研究は、写真、映画、テレビの諸作品がいかにかに社会を表象しているかを、あるいは、それらがいかにかに社会に影響しているかを、メディアごとに分析するものにすぎなかった。しかし現代社会にあっては、デジタル・カメラやその周辺機器の出現は、映像文化と人間との関係を大きく変化させ、例えば私的な日常生活を自ら映像で記録し、保存し、インターネットを通して交換しあうといった、新しい文化を生じさせつつある。従って映像文化の分析は、人間がいかにかに映像を「見る」のかという従来の問題だけでなく、いかにかに映像を「撮る/撮られる」のかをも分析の対象に加えなければならない。

本研究はそうした新しい映像研究を社会的に展開していくための、基礎的な理論研究と具体的な映像現象の実証研究の両者を進めることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は8名による共同研究であり、かつ社会学領域と美学領域を横断する総合的な映像研究である。こうした特徴を踏まえ、「最先端の映像理論を検討し、映像文化理論の刷新を行なう基礎研究」(基礎理論研究班)および「各種資料収集により具体的な映像文化現象を説明・分析する事例研究」(実証研究班)の2領域(2班)に分け研究を実施した。基礎理論研究では、映像とは何かを、現実の痕跡性(インデックス性)に見る写真論的な考え方(写真論的視覚論)に対して、映像が「動く」ことを基盤に見る映画論的な考え方(アニメーション論的視覚論)の可能性を新たに探求しつつあるトム・ガニング(Tom Gunning)の諸論考を読んで議論を進めた。

またの実証研究については、映像文化をめぐる書籍の出版を目指し、各研究担当者が実証的・歴史的な資料をもとに、調査・分析を進めた。

さらに、上記の研究を進めるにあたり、映像理論の専門家および歴史的な映像文化研究の専門家から、本研究において必要となる専門的知識の供与を受けた。招聘した研究者は、加藤裕康氏(東京経済大学)、佐藤守弘氏(京都精華大学)、向後恵理子氏(明星大学)、飯田豊氏(立命館大学)、川崎佳哉氏(早稲田大学)、榎本千賀子氏(新潟大学)である(大学名は招聘時のもの)。

本研究はこうした理論研究、実証研究、また専門的知識の供与を研究方法の軸として、調査・分析を実施した。

4. 研究成果

1) 新たな映像理論の研究

ガニングの諸論考を翻訳する作業をすすめながら、欧米圏における最新の映像理論の理解を試みた。

従来、映像研究の中心は「インデックス(痕跡)性」として映像を捉える志向を持っていた。その議論は、様々な映像を写真論的に捉える前提であったといつてよい(写真論的視覚)。

しかし、そのような理論的前提では、痕跡性を限りなく消失させ、装飾することで写真を楽しむプリクラや、痕跡性を無化しつつ、自在に変化する動きを楽しむCGやアニメーションといった新たな映像文化を把握することは困難である。現代社会において日常化しているこうした映像文化に対して、旧来の映像理論が、その現実的な状況を十分に捉えられずとも言い難い。

こうした状況に対し、例えばレフ・マノヴィッチは、映画をアニメーションの一領域と考えるような、映像の運動性、幻覚性を中心に置いた新たな理論を提唱する。

本研究はこうした新たな理論的潮流のなかにあっても最もユニークな議論を展開しているガニングの映像理論を讀解し、理解することを試みた。ガニングは映像理論の新たな潮流を踏まえつつ、従来の写真論的視覚に対し、映像が「動く」ことを基盤に見る考え方(アニメーション論的視覚論)の可能性を探求している。また彼は、この理論をベースにして、19世紀以降の映像文化の歴史を再考し、例えば漫画と映画、従来の映画とCG技術との関連などを分析する。

今回の基礎研究では、こうした理論的視点を含むガニングの論文について、以下の9点の論文を翻訳することを試みた。

1. "New Thresholds of Vision: Instantaneous Photography and the Early Cinema of Lumiere" (2001)
2. "Gollum and Golem: Special Effects and the Technology of Artificial Bodies" (2006)
3. "Moving Away from the Index: Cinema and the Impression of Reality" (2007)
4. "What's the Point of an Index? Or, Faking Photographs" (2008)
5. "The Attraction of Motion: Modern Representation and the Image of Movement" (2009)
6. "The Play Between Still and Moving Images: Nineteenth-Century "Philosophical Toys" and Their Discourse" (2011)
7. "The Transforming Image: The Roots of Animation in Metamorphosis and Motion" (2013)
8. "Animating the Instant: The Secret Symmetry between Animation and Photography" (2014)
9. "The Art of Succession: Reading,

Writing, and Watching Comics" (2014)

また上記の翻訳は書籍としてまとめ、みずず書房より出版することが決定している。

2) 映像文化現象の実証研究(及び著作出版)

さらに本研究では、W・ベンヤミンが「複製技術時代の芸術作品」において、提唱した「アウラの凋落」の命題を再考した。

ベンヤミンの命題は、新たな(映像)テクノロジーの出現が、人間の世界に対する知覚や認識の枠組をどのように変え、またそれに伴い、人々の社会生活をどう変化させたかという人類史的な問題に私たちを振り向かせる。こうしたベンヤミンの命題とともに、1)で実施した基礎理論研究の知見も交えつつ、映像文化を下記の観点から捉え直すことを目指した。

まず第一に、写真、映画、テレビなどのメディアをテクノロジーの観点から捉え直す試みである。その際注目されるのは、「パーソナル化」という変化である。20世紀の写真、映画、テレビは、無数の大衆に見られることで成り立つがゆえに、ベンヤミンの視座からすれば、大衆を主役とした公共的な社会変革の可能性を感じ取れるものとなる。だが、現代社会の映像文化は、公的な「見る」文化から、私的な「撮る/撮られる」へと変化している。いわば現在は、個々の私的世界が通信で繋がれているだけで、大衆的に共有される文化が存在しない事態を導いている。このような大衆的テクノロジーからパーソナルテクノロジーへの下部構造の変化を社会学的に捉えること、これが現代においてベンヤミンの議論を引き継ごうとするときの課題にもなる。

第二に、映像文化と社会・政治の関係についての観点である。ベンヤミンは複製技術によって政治的秩序のアウラは凋落すると論じた。しかし、近代社会はベンヤミンの議論に抗うように、映像作品を家族、共同体、国民国家といった社会秩序のシンボルとして役立ててきた。しかし、先に指摘したパーソナル化の変化によって、人々はシンボリックな映像利用ではなく、友人間コミュニケーションでの写真利用(プリクラ)や、Youtubeによるホームムービーの氾濫など、パーソナルな映像利用を軸として社会と関係を結びつつある。こうした新しいネットワーク社会における映像文化分析が必要となる。

第三には、ベンヤミンにおけるアウラの凋落の命題が、娯楽やコミュニケーションにおける映像利用とは全く無関係な場所で、生じていることである。

具体的にいえば、この場所とは医療などの科学領域、あるいは監視カメラなど警察領域の映像である。テクノロジーの進展から現れたこうした映像は、より身体の内奥の光景を不気味な機械的光景として私たちの前に差し出したり、24時間とりとめもなく身体を捕

捉し続けたりしている。この冷徹な眼差しに取り囲まれて、私たちの身体の尊厳性は突き崩されている(=アウラの凋落)。私たちは、こうした映像が日常生活に対して発揮する破壊的な力を議論する必要がある。

さらに第4に、本来、ベンヤミンによればアウラが凋落するはずであった現代社会で、むしろ特定の人間にアウラをまとわせる反動的な行為が存在していることを問題にする必要がある(ベンヤミン自身も同時代の全体主義とスター主義にこれを観察していた)。それは例えばスター中心主義である。私たちは誰かを崇拜するという欲望を抑えられない。このように、機械的な映像に、呪術的な力を感じ取ることをやめない映像文化の存在を、私たちはどのように捉えればよいのか。

現代の映像文化をめぐるこうした観点を通して、私たちは実証的・歴史的な考察を試みた。またその成果を、研究代表者の長谷正人を編者として、『映像文化の社会学』の題名で有斐閣より教科書的な書籍として刊行した(2016年)。その書籍の内容は以下の通りである(目次に準ずる)。

【第1部 テクノロジーとしての映像文化】

第1章 写真というテクノロジー

(菊池哲彦)

第2章 映画というテクノロジー

(長谷正人)

第3章 テレビというテクノロジー

(加藤裕治)

第4章 パソコンというテクノロジー

(鈴木洋仁)

【第2部 コミュニケーションとしての映像文化】

第5章 個人をつくる映像文化

(菊池哲彦)

第6章 コミュニケーションをつくる映像文化

(角田隆一)

第7章 社会をつくる映像文化1

(長谷正人)

第8章 社会をつくる映像文化2

(大久保遼)

【第3部 科学としての映像文化】

第9章 医療における映像文化

(増田展大)

第10章 警察と軍事における映像文化

(松谷容作)

第11章 人類学における映像文化

(大久保遼)

【第4部 呪術としての映像文化】

第12章 スターという映像文化

(加藤裕治)

第13章 心霊現象という映像文化

(前川修)

第14章 アニメーションという映像文化

(増田展大)

3) 研究成果発表シンポジウムの開催

上記1)および2)の研究成果の報告、およびその論点を広く議論するための場として、2017年9月8日(金)に早稲田大学戸山キャンパスにおいて講演のゲストも招き、シンポジウムを開催した。タイトルは「撮られること」の映像文化」。内容は以下の通りである。

・趣旨説明と報告者紹介(長谷正人)

・第一報告

榎本千賀子氏(新潟大学):「未だ慣れぬ「撮られること」:今成無事平たちの幕末~明治初頭の写真実践」

・第二報告

馬場伸彦氏(甲南女子大学):「自撮りと女子キャラ化する身体とイメージ」

・第三報告

角田隆一氏(横浜市立大学):「盛る」写真文化を考える」

・全体討論

登壇者からは、明治初期の人々がカメラを前にした際の身体の振る舞いとその象徴が示す意味や、近年のインスタグラムなどの自撮り写真の類型やそのコミュニケーション的な側面などが報告された。

このような報告を受け、全体討論では主に写真における被写体を取りうる身振りや振る舞いの歴史的変遷とその意味について議論が行われた。特に、現代的な自撮り行為の持つ意味や身体イメージの変容などが考察され、そうした現代の映像文化の日常的状況を捉えうる映像理論の可能性が話し合われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

前川修、『明るい部屋』における遊行と転回、美学芸術学論集、査読有、14、2018、pp.5-40

増田展大、歪んだ顔写真、または顔認証技術をめぐる試論、エクリヲ、査読無、7、2017、pp.226-237

松谷容作、環境内存在としてのコンピュータ コンピュータを介した経験の更新についての一考察、総合文化研究所紀要、査読有、34、2017、1-18

Ryo Okubo、Japanese Modernity and Media Studies of Screens、International Journal of Japanese Sociology、査読無、27-1、2018、120-137

長谷正人、人間 原節子 そのエロスの源泉、ユリイカ、査読無、48-3、2016、pp.90-99

長谷正人、テレビジョン、低俗番組、弱者の民主主義 放送の公共性をめぐって、表象・メディア研究、査読無、6号、2016、pp.11-30

前川修、デジタル写真の現在 2016、美学芸術学論集、査読無、第2巻、2016、pp.6-33

前川修、写真イメージの人類学 ベルテインクの写真論、立命館言語文化研究、査読無、27-4、2016、pp.37-48

長谷正人、テレビジョン、生活革命、子どもの民主主義、月刊民放、査読無、45-8、2015、pp.12-15

増田展大、平面を走ること 『時をかける少女』の影をめぐって、ユリイカ、査読無、47-12、2015、pp.193-200

松谷容作、メディア、環境、生命体;細田守の初期映画作品を中心に、ユリイカ、査読無、47-12、2015、176-184

〔学会発表〕(計12件)

前川修、ふたつのアニメ(ーション)/カクストロフの間で、北京大学(招待講演)、2017年10月20日、北京大学(中国)

前川修、心霊現象と映像 映像と死、山西大学(招待講演)、2017年10月18日、山西大学(中国)

増田展大、身振りはどのように見えるのか 映像史の観点から、日本質的心理学会第14回大会、2017年9月9日、首都大学東京(東京)

松谷容作、リ・ミンホの画像とリアリティ、トークイベント「Triangle Talk - Lee Min Ho's 美術世界とビヨンド」、2017年4月15日、イムラアートギャラリー(京都)

松谷容作、メディアへの態度 THE COPY TRAVELERSを例として、「Visualquest 234」展シンポジウム(国際学会)、2017年10月21日、Japanpyeong Automotive Center(ソウル特別市、大韓民国)

松谷容作、宇宙とメディア 感性をめぐる考察、国際シンポジウム『東アジア漢文圏における日本語教育・日本学研究の新たな開拓』(国際学会)、2017年12月23日、暨南大学(中国)

角田隆一、「盛る」写真文化のリアリズムを考える、「デジタル化時代における映像文化の日常の変容」公開シンポジウム、2017年9月8日、早稲田大学(東京)

大久保遼、文化研究とメディア考古学:メディア概念の比較文化的検討へ向けて、カルチュラル・スタディーズ学会、2017年6月24日、早稲田大学(東京)

松谷容作、あいつは、たべていい?;映像映像における食の分類学、第66回美学学会全国大会、2015年10月11日、早稲田大学(東京都)

前川修、デジタル写真の現在、美学学会西部会第305回研究発表会、2015年9月19日、京都工芸繊維大学(京都府)

加藤裕治、船戸修一、武田俊輔、祐成保志、テレビにおける「農業・農村」表象構築プロセス(3) 秋田県を撮影対象としたNHK『明るい農村(村の記録)』を事例として、日本社会学会第88回大会、2015年9月19日、早稲田大学(東京都)

菊池哲彦、メタファーとしての爆発:20世紀初頭における都市表象をめぐって、表象文化論学会第10回大会、2015年7月4日、早稲田大学(東京都)

〔図書〕(計9件)

原田健一・水島久光編、松谷容作、学文社、手と足と眼と耳:地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究(「記憶のトリガー映像アーキビスト養成のための一提言」)、2018年、312(184-201)

長谷正人、東京大学出版会、ヴァナキュラー・モダニズムとしての映像文化、2017年、278

飯田豊編、大久保遼、北樹出版、メディア技術史:デジタル社会の系譜と行方(改訂版)(第2章 写真はどこにあるのか:イメージを複製するテクノロジー、第3章 映画の歴史を巻き戻す:現代のスクリーンから映像の幼年時代へ)、2017年、168(25-39、40-54)

長谷正人編、有斐閣、映像文化の社会学、2016年、290

桐光学園中学校・高等学校編、長谷正人、左右社、高校生と考える世界とつながる生き方(映像文化の考古学)、2016、336(215-230)

杉田敦編、長谷正人、岩波書店、ひとびとの精神史 第7巻 終焉する昭和1980年代(宮崎駿 職人共同体というユートピア) 2016、337(171-196)

野上元、小林多寿子編、菊池哲彦、角田隆一、ミネルヴァ書房、歴史と向きあう社会

学：資料・表象・経験（社会学の史料としての写真の可能性、家族写真から震災をまなざす被災写真をめぐる表象と意味変容）
2015、384（25-43、109-128）

土屋紳一、遠藤みゆき、大久保遼編、青弓社、幻燈スライドの博物誌 プロジェクション・メディアの考古学、2015、179

石田英敬・吉見俊哉・マイク・フェザーストーン編、大久保遼、東京大学出版会、デジタル・スタディーズ3巻 メディア都市（映像文化へのアプローチ：遍在するスクリーンのアルケオロジー）2015、364（83-101）

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷 正人（HASE Masato）
早稲田大学，文学学術院，教授
研究者番号：40208476

(2) 研究分担者

菊池 哲彦（KIKUCHI Akihiro）
尚絅学院大学，総合人間科学部，准教授
研究者番号：10419252

前川 修（MAEKAWA Osamu）
神戸大学，人文学研究科，教授
研究者番号：20300254

加藤 裕治（KATO Yuji）
静岡文化芸術大学，文化政策学部，准教授
研究者番号：20633861

松谷 容作（MATSUTANI Yosaku）
同志社女子大学，学芸学部，助教
研究者番号：60628478

大久保 遼（OKUBO Ryo）
愛知大学，文学部，助教
研究者番号：60713279

増田 展大（MASUDA nobuhiro）
立命館大学，先端総合学術研究科，非常勤講師
研究者番号：70726364

角田 隆一（YUNODA Ryuichi）
横浜市立大学，国際総合科学部（八景キャンパス），准教授
研究者番号：80631978

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：

(4) 研究協力者

（ ）